

作家紹介

Pierre ピエール・ボナール (1867年10月3日ー1947年1月23日) Bonnard



パリ郊外のフォントネー＝オー＝ローズで陸軍省役人の家庭に生まれる。20歳で法律の勉強をする傍らアカデミー＝ジュリアンに通いそこでセリュジェやドニと親交を結び、23歳で「ナビ派」の創立メンバーの一人となる。以後アンデパンダン展などへ作品を出品。そのほかロートレックの影響を受けながら商用ポスターなどの仕事にも精力的に取り組んだ。43歳での南仏初訪問をきっかけに作品の色彩は一層鮮やかさを増し、以降南仏を拠点に制作を続ける。



Georges ジョルジュ・ルオー (1871年5月27日ー1958年2月13日) Rouault

パリのベルヴィル地区で家具職人の家庭に生まれる。19歳でエコール・デ・ボザールに入学。のちにルオーの生涯における師となる画家ギュスターヴ・モローのもとで絵画修業に励む。同教室ではマティス、マルケらと親交を深めた。とりわけ道化師や娼婦といった社会的弱者や宗教的テーマの作品を制作し、1920年代以降になるとマティエールは一層豊かさを増し、色彩はより鮮やかになった。画家の精神性と共に主題や作風は移り変わりながらも、常に人間の本性に焦点を当て、晩年まで制作活動を続けた。

Marie マリー・ローランサン (1883年10月31日ー1956年6月8日) Laurencin

パリのシャブロール街で婚外子として生まれる。21歳でアカデミー・アンペールに入り、本格的に絵画修業を始める。同塾ではブラックやルバープなどのちに活躍する芸術家たちと親交を深めた。ブラックに触発され退塾したのち、モンマルトルの「バトー＝ラヴォワール（洗濯船）」に通い始め、この頃ピカソとも知り合う。23歳のときにピカソの紹介で知り合った詩人アポリネールと恋人となり、彼をはじめとする芸術家仲間たちから多くの刺激を受ける。第一次世界大戦によるスペイン亡命後、パリに戻ったローランサンは一躍流行画家へと名を馳せる。この頃からローランサンの代名詞ともいえる淡い色彩と柔らかな女性表現が体現化された。



作家紹介



Richard リチャード・ウィルソン Wilson

(1713/14年8月1日ー1782年5月11日)

イギリス・北ウェールズのベネゴーズで牧師の息子として生まれる。肖像画家として活躍したが、36歳でのイタリア滞在をきっかけに風景画家に転向。帰国後、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツの創立メンバーとなり、両協会の展覧会に出品し成功を収めた。しかし、後年は名声が急速に低下した結果、財政難に陥り、さらには飲酒癖が悪化。晩年はますます酒に溺れるようになり、親戚のもとに移り住んだのち 68歳で亡くなる。

Joseph Mallord ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー William Turner

(1775年4月23日ー1851年12月19日)

イギリス・ロンドンのコヴェント・ガーデンで理容師の息子として生まれる。14歳でロイヤル・アカデミー・オブ・アーツに入学。同アカデミーの展覧会で水彩画と油彩画を出品し、27歳で史上最年少の正会員となる。44歳でイタリアに初訪問。そのほかヨーロッパ各地の旅行を経て、単純な再現ではなく自身の感覚を投影する前衛的な風景画を展開した。ターナーの特徴ともいえる光と大気に包まれた革新的な風景表現は、のちの印象派をはじめとした多くの芸術家たちに多大な影響を与えた。



HAPPY ANNIVERSARY
今年で
生誕250年!!
HAPPY ANNIVERSARY



John ジョン・コンスタブル Constable

(1776年6月11日ー1837年3月31日)

イギリス北東のサフォークで製粉業を営む裕福な家庭に生まれる。23歳でロイヤル・アカデミー・オブ・アーツに入学。生涯イギリスから出ることなく、戸外での油彩スケッチを行い、架空の風景を描くよりも気象学や地質学など知識に基づく観察を通して、自身が慣れ親しんだサフォークの田園や農村、運河などの風景を描き続けた。晩年は銅版画集『イングランドの風景』の出版を構想し、また風景画史の教鞭を執るなど、バルビゾン派や印象派の先達となった。

作家 紹介



Salvador

サルバドール・ダリ

(1904年5月11日－1989年1月23日)

Dalí

スペインのフィゲラスで裕福な家庭に生まれる。17歳で王立サン・フェルナンド美術アカデミーに入学するが、5年後に学校を批判したことで永久追放される。1929年にポール・エリュアールの妻ガラと出会いのちに結婚。同年シュルレアリスム・グループに加入する。「偏執狂的＝批判的」方法を主張し、シュルレアリスムの代表格として知られるようになるが、グループ創設者である詩人ブルトンと対立しグループと距離を置くようになる。1940年に戦禍を避けてアメリカに亡命し、以降8年間滞米する。その間に文筆や舞台、映画、写真など様々な分野において制作活動を展開した。

Pablo Ruiz

パブロ・ピカソ

(1881年10月25日－1973年4月8日)

Picasso

スペインのアンダルシア地方マラガに生まれる。14歳でバルセロナに移住し、父親が勤める王立サン・フェルナンド王立アカデミーに入学。19歳のときにパリに訪問するが、このパリ旅行に同行した親友カサジェマスの自殺を機に、暗い青を基調色とした作品を続けて制作し、いわゆる「青の時代」に突入する。23歳でモンマルトルのアトリエ「バトー＝ラヴォワール（洗濯船）」に居を構えると、「バラ色の時代」へと突入し、造形への関心を深めていく。26歳でジョルジュ・ブラックと出会い、彼との共同作業によりキュビズムが開拓され、20世紀絵画に革命をもたらした。





Jean-Baptiste

ジャン=バティスト・カミュー・コロー

(1796年7月16日－1875年2月22日)

パリの裕福な織物商の息子として生まれる。26歳のときに画家ミシャロン、次いで画家ベルタンに師事する。ここで学んだ自然に対する注意深い観察と忠実な描写が、コローの芸術形成の基礎を築くこととなる。三度にわたるイタリア訪問を経て、風景画家として画壇からも認められ名声を得た。この頃から細やかで霞むような筆触を特徴する詩情豊かな作風で人気を博し、名実ともに 19世紀フランスにおける風景画の重要な存在となる。

作家紹介

Camille

カミュー・ピサロ

(1830年7月10日－1903年11月13日)

デンマーク領アンティル諸島のセント・トマス島でホルトガル系ユダヤ人として生まれる。25歳でパリに出て絵画修業に励む。アカデミー・シュイスに入学後、のちに印象派と呼ばれるグループの画家たちとの交流も深めた。1870年に勃発した普仏戦争ではロンドンに逃れ、同じく徴兵を免れるために同地にいたモネとともにターナーやコンスタブルをはじめとしたイギリス人画家の風景画と接し、深い感銘を受ける。後年にはスーラやシニャックといった若い画家たちから点描画を倣い、新たな芸術潮流にも挑んだ。



Alfred

アルフレッド・シスレー

(1839年10月30日－1899年1月29日)

パリの裕福なイギリス人家庭に生まれる。イギリス国籍でありながら、その生涯の大半をフランスで過ごす。18歳にロンドンへ留学するが、滞在中に絵画へ関心を抱きパリへ戻り、その後シャルル・グレールの画塾に入り、モネ、ルノワールと親交を結んだ。1870年に普仏戦争が勃発すると父親の事業が失敗し一家が倒産。生計を立てる手段が作品販売しかなかったが、シスレーの作品はあまり評価されず、残りの生涯は困窮した生活を送った。

Pierre-Auguste

ピエール=オーギュスト・ルノワール

(1841年2月25日－1919年12月3日)

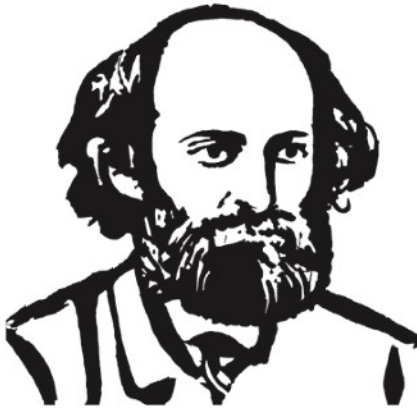
フランス中西部の町リムージュで生まれる。陶器の絵付け見習いを経て、20歳で画家シャルル・グレールの画塾に入り、シスレーやモネらと出会い交友を深めた。翌年にエコール・デ・ボザールに入学。28歳のときにモネとともに「筆触分割」を確立。1873年に自身のアトリエに芸術家たちが集まり「画家、彫刻家、版画家などによる共同出資会社（印象派グループ）」を結成。柔らかな筆触や豊かな色彩が人気を博した。晩年は持病のリウマチの悪化に苦しむが、痛みに耐えながら最期まで絵画と向き合った。



作家

紹介

介



Paul

ポール・セザンヌ

(1839年1月19日－1906年10月22日)

Cézanne

南仏のエクズ＝アン＝プロヴァンスの裕福な銀行家の家庭に生まれる。親友である文豪エミール・ゾラの後押しで22歳でパリに赴く。同地ではピサロ、ルノワールなどの画家たちと親交を結んだ。1870年代になるとピサロの導きにより、印象派の作風へ転換するも、1878年に印象派グループを離脱。1880年以降からは独自の絵画様式を確立するようになり、印象派が求めた光や大気の表現と鮮やかな色彩を保持しつつ、画面における被写体の質量や空間の構築を表現しようと挑戦した。

Armand

アルマン・ギョマン

(1841年2月16日－1927年6月26日)

Guillaumin

パリの労働階級家庭に生まれる。20歳でアカデミー・シュイスに通いピサロやセザンヌと親交を結んだ。1870年には二人のもとに訪れ、制作を共にしている。50歳で仕事を辞めてからはオランダ旅行や南仏といった遠方へ積極的に足を運ぶようになった。後年は若い画家たちと交友を深め、ギョマンの鮮やかな色彩や装飾性のある表現の追求は、のちの「フォーヴィスム（野獣派）」の画家たちにも影響を与えた。晩年はフランス中南部のクロザンで風景画を制作し続けるが、徐々に制作数は減っていった。



Maurice

モーリス・ユトリロ

(1883年12月26日－1955年11月5日)

Utrillo

フランスのモンマルトル地区ポトー街出身で画家シュゼンヌ・ヴァラドンの子。少年時代に飲酒癖から精神病院に入院し、21歳で退院後、治療の一環で絵を描くことを医師に勧められる。以降、独学で作品制作を続け、やがてユトリロの画業における絶頂期の「白の時代」（1909－c.1912）に到達する。白を基調色とする哀愁に満ちたパリの街並みを描いた作品が注目され、30歳で名声を得た。生涯アルコール依存症に悩まされ続けたが、晩年まで制作を続けた。



作家紹介

Kees Van

キース・ヴァン・ドンゲン

(1877年1月26日－1968年5月28日)

オランダのロッテルダム近郊デルフスハーフェンで生まれる。20歳で初めてパリを訪れ、数ヶ月滞在。2年後にはモンマルトルに移り住み、アトリエを構える。同地ではアトリエ「バトー＝ラヴォワール（洗濯船）」でピカソと交流する。28歳のときには「フォーヴィスム（野獣派）」へ移行し、力強くも強烈で個性的な表現を作品に描出した。以降フォーヴの仲間たちがセザンヌ的な関心へ方向転換したときも、鮮やかな色彩表現を追求し続けていく。なかでも女性を主題とする作品は、華奢で優美な身体表現と洗練された色彩表現から絶大な人気を博した。



HAPPY ANNIVERSARY
今年で
生誕140年!!
HAPPY ANNIVERSARY

Jules

ジュール・パスキン

(1885年3月31日－1930年6月5日)



ブルガリアのヴィンデンで裕福な穀物商人の家庭に生まれる。17歳のときにウィーンへ渡り、翌年ミュンヘンの美術学校へ通いながら、風刺雑誌『ジンプリッツィシムス』に挿絵を寄稿し、人気作家となった。20歳でパリに移住しモンマルトルに居を構えるが、第一次世界大戦が勃発すると渡米。35歳でパリに戻り、アメリカでの有意義な経験によってパスキンの芸術は集大成へと向かっていく。この時期の作風は「真珠母色の時代（レザネ・ナクレ）」と称され、独特の虹色に輝く色彩と震えるような描線が特徴の油彩画を描き、彼の名声は頂点へと達した。

Léonard Tsugouharu

藤田嗣治

(1886年11月27日－1968年1月29日)

東京府牛込区（現東京都新宿区）で陸軍軍医の家庭に生まれる。父親の上司であった森鷗外の勧めもあり、東京美術学校（現東京藝術大学）に入学する。卒業後、26歳で渡仏。パリ・モンパルナスに住み、ピカソ、ヴァン・ドンゲンといった「エコール・ド・パリ（パリ派）」の画家たちと親交を深めた。交流のなかで様々な刺激を受け、独自の画風を確立させる。43歳のときに帰国。日本を活動拠点とし、第二次世界大戦中には作戦記録画を制作するが、戦後に画壇から戦争責任を問われ再び渡仏。69歳のときにフランスに帰化し、晩年は「レオナール・フジタ」として精力的に制作を続けた。



作家紹介

Marc

マルク・シャガール

(1887年7月7日ー1985年3月28日)



帝政ロシア領・ヴィテブスク（現ベラルーシ）に生まれる。サンクトペテルブルクの美術学校で学んだあと、24歳のときにパリを訪れる。モンパルナスにあるアトリエ「ラ・リュージュ（蜂の巣）」に移住し「エコール・ド・パリ（パリ派）」の前衛芸術家たちと交流を深めた。27歳で祖国に戻り、地元で美術学校をつくるなど多方面で活躍していたが、36歳のときに再びパリで活動する。1941年にナチス・ドイツの迫害を逃れるために渡米し、約7年間滞在。フランスに戻ってからは絵画に留まらず数多のジャンルの作品を手がけた。

Ben

ベン・シャーン

(1898年9月12日ー1969年3月14日)



帝政ロシア領・コヴノ（現リトアニア）でユダヤ人家庭に生まれる。8歳で家族とともにアメリカに渡り、その後ブルックリンに移住。叔父の石版画工房で修行を積みながら、夜間の美術学校に通い絵画の基礎を学んだ。ニューヨーク大学で学んだのち芸術家へ転向。30代に制作した「ドレフュス事件」や「サッコとヴァンゼッティ事件」を取り上げたシリーズで一躍注目を浴びる。第二次世界大戦後もアメリカの公民権運動や、1954年に起きた「第五福竜丸事件」を題材にした作品など、迫害、差別、公害といった社会問題を扱った作品を多く残している。

Philippe

フィリップ・ハルスマン

(1906年5月2日ー1979年6月25日)



ラトビア出身の写真家。15歳のときに父親のカメラを手にしたことをきっかけに独学で撮影方法を学ぶ。1931年にパリに移るとモンパルナスにスタジオを構え、商業写真家として活動する。1940年にアメリカに亡命し、翌年にダリと出会うと、以降 37年間にわたって度々共同制作を行うようになる。また、『ライフ』誌の表紙を最多の 101回撮影し、代表的なシリーズのひとつ「Jump」では、マリリン・モンローやオードリー・ヘップバーンらを撮影している。当時の著名人をモデルに、彼らを象徴する身近で印象的なポートレートを数多く残した。